

当報告の内容は著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：コタキナバル・リエゾンオフィス企画による交換講演会 (UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Asia)

日時：2018年2月5日(月) 14:00-16:25

場所：マレーシア。サバ大学 (UMS) 人文学部

参加者：33名 (講演者含む)

内容；

AA研コタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO) とマレーシア。サバ大学 (UMS) 人文学部の共催によりコタキナバルの同大学キャンパス内の人文学部で交換講演会 (UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Asia) が実施された。当日はプログラムに沿って AA 研側から 2 名、UMS から 1 名の研究者が参加して講演を実施した。開会に先立って KKLO 拠点長の床呂郁哉 (AA 研) から趣旨説明がなされた。

講演では、まず最初の発表者の池田池田昭光研究員 (AA 研) が "Sectarianism in the Field?: Reconsideration from an Ethnographic Perspective in Lebanon" と題した発表を実施した。その概要は以下の通りである。

レバノン共和国は小国ながら中東諸国のなかでも特に宗教的多様性に富み、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教の様々な宗派を擁し、かつ、キリスト教徒人口の割合は最も高い。これらの集団は「宗派主義」と呼ばれる独特のシステムに組み込まれている。このシステムのもとでは、国民議会の議席や政府首脳部のポストに関して一定の割合で特定の宗派に対する割り当てがなされるのが特異である。

国民全体を巻き込むマクロなシステムとして存在する宗派主義とミクロな生活の現場との関係性はどのようなものであるか。人口 5 万人ほどの調査地カップ・イリヤースは、宗派的な複合性に特色があるが、人々の日常生活において、宗派間の境界は、強烈に意識されながらも「否定され」、「隠され」るように見えることがある。しかし、宗派間の境界を「隠す」時の人々の振る舞いは、同様に、宗派に関わらない日々の生活の場面 (モノの売買) にも見出された。両者に通底する側面を検討すると、「隠す」というよりも、隠そうとした対象が隠しきれずに「残り」、かえって調査者に対して「示される」ことが見てとれた。

ならば、むしろこうした「隠しつつ示す」という日常的な振る舞いこそが生活の基底にあり、宗派主義はこうした日常的振る舞いの一部として存在しているとも考えられる。一見すると人々は宗派主義的なものから距離を取っているつもりかもしれないが、その実、彼らは宗派主義を支えているのである。

続いて 2 番目の発表者の塩原朝子准教授 (AA 研) はインドネシア・マレーシアでの言語ドキュメンテーションに関する発表を実施した。この発表では、インドネシアとマレーシアの社会言語学的概観とアジア・アフリカ言語文化研究所を中心とする言語学チームが進めている少数言語・危機言語のドキュメンテーション活動の紹介を行った。

インドネシア・マレーシアでは世界で話されている言語の 12 パーセント以上を占める 800 以上の言語が話されている。特に言語多様性が顕著なのはニューギニア島西半分を占めるパプア州、西パプア州とインドネシア東南部の島々から構成される南東諸島州 (Nusa Tenggara Timur 州) である。この地域ではオーストロネシア語族に属する言語と、それ以外の言語 (通称パプア諸語) が混在して話されており、その言語の接触によると思われる様々な特徴が多く、多くの言語学者を魅きつけて来た。一方、マレーシアやインドネシア西部も多様な言語が話されていることで知られており、例えばサバ州でも Kadazan Dusun グループの言語、Sama=Bajau グループの言語、マレー語の変種など多様な言語が話されている。

アジア・アフリカ言語文化研究所を中心とする言語学チーム (LingDy プロジェクト) は 2014 年から現地の話者コミュニティ・研究者コミュニティと共同での言語ドキュメンテーション活動を行っている。具体的にはコタキナバルを含む 6 地点で言語ドキュメンテーションの理念や手法を共有するためのワークショップを開催し、話者とともに少数言語・危機言語のデータを録音し、転写・翻訳・文法情報などのアノテーションをつけた上で公開するという試みを行っている。録音データを上記のプロセスを経て汎用的な形に加工することは時間のかかる作業であるが、LingDy プロジェクトでは話者・現地研究者とともにドキュメンテーションを少しずつ進めることを目指している。

そして最後に、3 人目の講演者である Jacqueline Pugh-Kitingan 教授 (UMS) は “Rivers as Roads: Cultural Contacts and Musical Diffusion between Maritime and Interior Peoples of Sabah.” と題した講演を実施した。この講演ではボルネオ島、とくにサバにおける伝統的な地理環境の特性から説き起こし、同地域における内陸部と沿岸部をつなぐ河川がもつ伝統的な重要性を指摘した。河川は多様な産物はもとより音楽を含んだ異なる文化の伝播や融合、影響に関しても極めて重要な役割を果たしてきた。Jacqueline 教授はサバにおける自身の豊富な調査経験をもとに、複数の映像・動画や音声資料を交えながら、沿岸部のいわゆるマレー系ムスリム諸民族集団と、内陸部のいわゆるドゥスニック系民族集団との間での音楽を含んだ文化の交流や影響関係などを含めサバの文化の多様性に関する講演を実施した。以上の 3 人の講演者の発表終了後には参加者を交えた質疑応答が熱心に行われた。

(以上、終わり。文責：床呂郁哉)